



第 37 号
平成十一年
(1999)
10月15日発行
(年4回発行)

発句と挨拶

東 明雅

発句には挨拶が必要であるが、その挨拶は相手・時・場所次第によって変化し、毎回固定したものではない。たとえば挨拶によく似た辞儀にも五体倒地の礼拝から、平身低頭の三拝九拝、最敬礼、一礼・黙礼・会釈などさまざまな種類があつて、それぞれ適当な時に適当な方法で感謝の意を示し、尊敬の意をあらわしているのである。小笠原の礼法では真の礼・行の礼・草の礼と区別しているようであるが、発句の挨拶もせめてこの位は分別して作らないと、効果を上げられないのではなからうか。今、真・行・草の挨拶の例を芭蕉の作品から取り上げ説明してみよう。

狂句木がらしの身は竹斎に似たるかな
貞享元年、名古屋の野水邸で、全く初対面の連衆と一座した芭蕉は、自己紹介をかねて、

自分を名古屋馴染の藪医師竹斎に比すことによつて、一座の者に挨拶している。それ故、亭主の野水や連衆の重五までが、芭蕉にならつて自己紹介をかねた発句を作つて挨拶し、かくて「冬の日」五歌仙は出来上がったのである。これはまさに真の挨拶の発句であろう。しかし、このように堅くらしい挨拶の発句は、芭蕉一代の中でもこの時限りのようである。旅人と我名呼ばれん初しくれ

たとえば貞享四年の由之亭における「笈の小文」の旅送別会の発句では、一座が愛弟子ばかりだっただけに、自己紹介というよりは、自分の好きな旅と初時雨を讃える挨拶の句となつてゐる。これは行の挨拶の発句であろう。そもそも、発句の挨拶は普通、客が主に対して、またその時・その場に対する挨拶を含んでいるのがよいとされるが、たとえば月毎の例会で、メンバーも場所も変りばえない時は挨拶するものに窮する場合もある。そのような時は、当季を詠みこむだけで挨拶になるとも言われる。たとえば元禄七年、大坂の其柳亭で、支考・酒堂・惟然などと巻いた一巻の発句は「昨日からちよつくと秋も時雨かな」であつたが、後に改めて「秋もはやばらつく雨に月の形」とした。これはいわば草の挨拶の発句であろう。

原句はいかにもお粗末であつたが、改案の句になると、俗語を使った軽みは同じであるが、晩秋のものさびた季節感を出し、これな

ら挨拶としても十分であろう。

要するに、俳諧の席で客が主人に挨拶し、また主人が客に挨拶を返すのは、会の始まる前に主客お互い、また一座の気分を和ませ、互いに志の通い合う仲間同志である事を確認する為である。それさえ出来るならば、あるいは出来ているならば、挨拶は簡単の方がよいだろうし、あるいは挨拶など無くてもよいのである。

例の「五月雨を集めて早し最上川」の一字を換えて、「五月雨を集めて涼し最上川」としただけで、元禄二年五月、大石田における歌仙は、発句に挨拶をもつ事になつた。これは、客である芭蕉が、亭主である高野一栄に対する挨拶であるが、この時芭蕉は亭主一栄の外に、彼が旅中、数句を送つて馴れ親しんだ出羽の国に対して、最上川を出す事によつて挨拶をしている事を忘れてはならない。

「三冊子」(赤)に、

早稲の香や分け入る右は有磯海
一尾根はしぐるる雲か雪の不二

の二句を掲げ、大国に句を作る場合は、その大国にふさわしい品格のある山川名所を詠めと教えてゐる。加賀の国なら有磯海というような名所、富士ならば名山にふさわしい大景を詠んでこそ挨拶ともなるであろうと言つてゐるのを思い出して欲しいところである。

一字庵菊舎

河野 玄麿

田上道、宝曆三年（一七五三）山口県豊浦郡田耕村に生まれた。祖父は長州藩毛利家に仕える武士だったが、嫡子の病弱を理由に萩藩を辞し、田耕村に移り、医を業とした。

道の父由永のとき、再び萩藩に召され、下関の長府に転居。その年、道は十六才で村田利之助と結婚。しかし子供に恵まれないまま結婚八年目に、夫の利之助と死別した。

なめてしる無量寿の香や露の味
田上姓に復籍した道は三年間喪に服した。その間、独り身の淋しさを慰めてくれたのは俳諧であった。二十六才の時、「菊車」の号を受けている。

月を笠に着て遊ばばや旅の空
安永九年の晩夏、二十八才の道は旅を思い立つ。当時女性が一人旅をするには尼僧になるほかなかったのだらう。

先ず萩の浄土真宗清光寺にて得度。法名釈妙意。

秋風に浮き世の塵を払ひけり

さらに萩の菅蒲庵其音を訪ね、美濃派の宗匠是什坊傘狂への紹介状を頂き、これより菊舎の遙かな旅が始まった。

防府より船で大阪へ、京都の西本願寺で十一月に勤まる親鸞聖人の報恩講に参詣。

報恩をおもへばかろし雪の笠

そして、美濃国岩手村の美濃派を継ぐ大野是什坊傘狂を訪ねた。傘狂は遠路を厭わず訪ねてきた菊舎を大いに歓待した。

したひ来たとのまことうららか 傘狂
咲く花に今届く手のただ嬉し 菊舎

菊舎はここを基点に所々を歴遊。思う存分研鑽を重ね、句もみるみるうちに上達した。

しかし菊舎には、親鸞聖人の旧跡を訪ね、芭蕉翁の跡を辿りたいという願いがあつた。

傘狂は饑別の句会を開き、菊舎に「信」の字を与え、「言行両つながら失せざるを信となす」の意から「一字庵」の号を授け、菊車の号を「菊舎」と改めた。

師傘狂の添文を頭陀袋に入れ、菊舎は越後へと歩を進めた。野に臥し、山に眠ることもあつた。関所の番人にも呼び止められた。

通さねばよしここで聞く郭公
越前では蓮如上人のご旧跡を訪ね、また松任に加賀の千代尼の跡を訪ねた。

千代尼は六年前、七十三才で没していた。つづいて能登、越中、信濃、越後を経て、奥の細道を逆に辿った。途中各地の著名な俳人を訪ね、その間、書も学んだという。

天明元年末初めて江戸の地に入り、傘狂の高弟白寿坊方に逗留。白寿坊の指導を受け、かたわら各地の句会や茶席に出席しているうちに、菊舎の名も次第に識者の間に広まり、諸侯・貴顕の宴にも招待されるようになって

いた。この江戸滞在は三年にも及んだ。

天明四年端午の節句まえに江戸を発ち、美濃・京都など訪ねながら、長府の父母のもとに帰り着いたのは、その年の暮れだった。

天明六年菊舎三十四才の夏、傘狂門下の細竹庵百茶坊が九州へ下る途中菊舎を訪ねた。誘われて菊舎も九州行脚の伴をした。

寛政二年、師傘狂が京都で勤修する芭蕉翁百回忌法要に参るため上京。菊舎三十八才。山門を出れば日本ぞ茶摘うた 菊舎

宇治の黄檗山万福寺の三門の前にこの句碑が建てられている。

寛政四年、傘狂没す。寛政五年菊舎再び江戸へ向かう。翌年菊舎は贈られた七弦琴を携えて帰郷。途次東海道五十三次の宿毎に画賛後に『手打菊一鳥の巻』として刊行した。

父母のもとに二年、しかし旅心止まず、漢詩を学ばんと思ひ立ち、七弦琴を携えて、九州の儒者、碩学を訪ね歩き、九州滞在二年の間に漢詩を自家薬籠中のものとした。

また長府藩主元義公にもたびたび召され、句座のお相手をしている。

文化八年五十九才の春、親鸞聖人五百五十年忌法要に参拝のため、五度目の上京。

いくたびかお手間かかりし菊の花
また数多くの茶会などにも招かれ、菊舎も大徳寺黄梅院に於いて茶会を開いている。

文化十年、母タカが八十四才で死去。

文政四年、念願の句碑を長府の徳応寺の境

内に建立。その下に父母の手紙などの文を納めたので、文塚と呼んだ。碑の表面の句は、

雲となる花の父母なり春の雨 菊舎

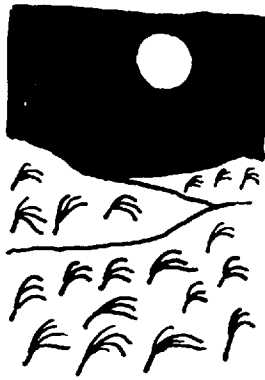
一人旅を続ける菊舎を行く先々で待つていたのは父母からの温かい手紙だった。菊舎の心はちようど春の雨に育まれる花のように、いつも父母の愛とみ仏のお慈悲に護られ、潤されていた。

文政九年、一字庵菊舎往生、七十四才。

辞世の句

無量寿の宝の山や錦時

(小郡町 信光寺前住職)



連句と私

山本要子

それは、思いがけない連句との出会いであった。店頭で何気なく手に取った、矢崎藍さんの『連句入門講座』。その軽妙な語り口に思わず引き込まれた。連句といえ、学生時代に学んだことがあったのを思い出す。わが家の本棚の片隅に吉田義雄著『芭蕉の俳諧』があった。内容はほとんど記憶にないのだが、教授のかん高いお声と洒脱な話しぶりが思い出される。それにしても連句は江戸時代のものと思ひ込んでいた私には、今もまだ続いていることが驚きであった。

定年退職後、何か趣味を持ちたいと思っていた矢先のこと。短歌や俳句に興味はあったが、一人でこつこつ作るのには淋しいと考えていたから、連句が人とかかわって作りあげる座の文学というところに魅かれた。連句との出会いは美によいタイミングだった。連句に魅かれたもう一つの理由は、「小学生の授業に使えるのではないか」であった。すでに退職している身であるが、長年の習性で何でも授業に結びつけてしまう。

このところ、学級崩壊をはじめとして子どもたちの変りようがよく話題になる。その一端を「しりとり遊び」に見ることができ、かつて教室のしりとり遊びは、二回りくらい

は軽く楽しんだものだった。しかし、最近は学級の半分も回らないうちに止まってしま一度出された言葉でイメージが固定化し、ちがう言葉が出てこないのだ。結構知識は豊富なのに、想像力、連想力が乏しいこと驚くばかり。活字より、映像による情報の中にとつぷりつつかり、「想像をめぐらす」などという時間はほとんどないからにちがいない。折しも、小中学校では二千二年より体験などを取り入れた総合学習が導入される。国語や算数などの各教科学習も総合的扱いをするようになる。連句を取り入れた国語学習などは、楽しみながら力をつける学習として最適ではないかと思う。修業をつみ、子どもたちと連句を巻くことが、目下の私の夢である。

§ 「猫養作品集 X」 作品集 5

▽ 作品 形式自由 但し、捌一人一巻

(捌は猫養会員に限る)

▽ 切 十一月末日

* 次の点にご注意ください。

四百字詰原稿用紙B4サイズ使用縦書き

「題」「捌名」「一巡までフルネーム」

「場所」「年月日」を明記すること。

▽ 送り先 柏市加賀二一十二一十一

〒二七七〇〇五一 梅田利子宛

井上 鶴鳴

あれはかれこれ十二年ほど前になるだろうか。会社の同僚の薦めでニフティサーブというパソコン通信へ入会した。目的は、書き貯めた短歌を発表する場がないかと思つてのことだったが、そのころ定型文芸を扱つていた「詩のフォーラム」で、私は本来の目的と異なる不思議なものを目の当たりにした。

誰かが作つた五七五の後に、七七の言葉をつなげる。そしてまた、五七五と誰かがつないでゆく。それは「連句」と呼ばれていた。爾来、「句を付ける」という魅力に、私はすっかり魅了されてしまった。そして様々な紆余曲折を経て、今私は猫蓑会にいる。中学生から創作を志し、小説・戯曲・短歌・俳句などいろいろなものを試し、作曲までした。その私が最後にたどりついた文芸の形が連句である。

連句は昔から、人々が集まつて行かう「座の文芸」だった。現代社会において、連衆各人のスケジュールの調整は非常に煩瑣である。ところが、パソコン通信は、この壁をものに見事に越えて見せた。パソコンの前に座る連衆は、いつでも自分の好きな時に、どんな句が付いているのか確かめることができる。付けようという気分になった時に付けることが

できる。一同に会して一座を組んだ時のあの「座の雰囲気」までは真似できないが、少なくとも、時間と空間を越えた必要最小限の座を形成することを、パソコン通信は可能にしたのである。実際、私の仲間の多くの、忙しすぎて俳席に出られなかつたり、地理的な制約で機会に恵まれない人々は、パソコン通信上の座で活発に付句をし、活動をしている。パソコン通信は、連句人口を爆発的に拡大させるポテンシャルを秘めていると言えよう。パソコン通信はまさに連句のためのメディアであると言つても過言ではない。

パソコン通信というと、敬遠される向きが多いかもしれない。しかし、ワープロが使えらるならば、パソコン通信は意外と簡単である。誰かひとり、パソコンに詳しい友人や実際にやっている人を知つていれば、その人の助けを借りて、すぐにでもネットワーク上の連句会に参加することができるのである。使う機械が複雑だからといって、句に影響が出るわけではない。パソコン通信の世界で巻かれていく連句は、紙と鉛筆で巻く連句と何ら変わらない。むしろ式目などの点が弱いので、有識者の参加を心待ちにしているという状態である。

連句という文芸の持つ、人を魅了してやまない力は、パソコンという先進的な分野でも熱気を孕んでどこまでもしなやかに人の輪を広げてゆくのであろう。

◇ 新刊紹介 ◇

『雪はことしも』 別所真紀子 著

(新人物往来社 一九〇〇円)

第二十一回歴史文学賞受賞の表題作は、芭蕉と越人とのこまやかな交情を描き、連句創作の深層をかいま見せてくれる。他四編。

きぬぐ、やあまりかぼそくあてやかに 芭蕉
かぜひきたまふ声のうつくし 越人

「元禄元年ころの芭蕉と越人とは、いかに呼吸がうまく合つて、また油がのりきつていたか」(『芭蕉の恋句』東明雅)を証する付合のひとつであるが、『雪はことしも』は、「深川の夜」と前書されたこの「鴈がねも」の巻の異常にとぎ澄まされた両吟の秘密に大胆に分け入っている。

『ちり椿』は、発句作者の自負を持つ凡兆とその妻羽紅、そして芭蕉の、陰翳に富む心模様が描かれる。

『上総の空を』、『浜藻春風』、『浜藻歌仙留書』では、屈託する一茶や夏目成美の間を縫つて、「鶯や田舎廻りのおちやつびい」と謳われた女流俳人五十嵐浜藻が、春風のように登場する。人物をめぐる資料や考証は正確で、文学史を小説で読む楽しさがある。もっとも、登場人物に託して著者は発句や付句を「代作」する離れ業をやつてのけており、この虚実の味わいも捨てがたい。(ほ)

猫養同人会

歌仙「夏木立」

青木泉水

捌

玉砂利を踏む閑かさや夏木立

継橋あたり生るる蜻蛉

冷しそば上手に箸をすべらせて

テープリピート寄席の出囃

主待つセダンの並ぶ扉の月

ばさりと落ちて割れし実石榴

やや寒の厨に猫の声きこゆ

初フライトでちよつと緊張

どなたにもアパートの鍵貸しますよ

僧衣脱ぎすてひしと抱擁

根津谷中本郷あたり坂多く

有明月に励む寒取

鬼やらひホームステイでもてなしぬ

アルミサッシにハングルの文字

外交は虚実皮膜の回顧録

行進曲の大好きな子ら

花浴びてバトントワラー先導す

またたきそめしひとつ春星

釣^{ナギ}りし鱒^{ナギ}しるしを付けて放しやり

原住民は砂金篩へる

盆莫蓮にひとり勝ちする若頭

銭湯やめて建てるマンション

虫干しの谷崎源氏拾ひ読み

柏とらへし塗籠の闇

ざんげ台愛の罪業また重ね

コンピューターの狂ふ百年

乙旗を掲げ元帥はるかなり

不定愁訴を払ふ体操

到来のロマネコンティ月の宴

誰にもやらぬ秋茄子の瑠璃

山近き落穂に鳥の群がりて

記念スタンプ次々に出る

王義之を教本にして書の稽古

雪解けの風類にうれしき

水脈を引くカヌーに花の散りかかり

新聞配達暮れ遅き道

平成十一年六月十六日 東郷神社和楽殿

連衆 久保田庸子 八角澄子 八代嬬

大窪瑞枝 豊田好敏 青木秀樹

歌仙「ほうたるや」

桑原美津

捌

ほうたるや近くて遠き水の音

桑の実取りの帰りくる頃

トランプをしようしようときりもなし淳子

金平糖の角を数へる

月の窓留学生もまじりみて

砂山を刷く晩秋の風

初猟に逸れる犬をしづめつつ

胃の腑にしみる猿酒の味

下町の頑固親父の洋食屋

バツイチ子連れでもあなた好き

返し文あらあらかしことあるばかり

寿貞を偲ぶ炉開の宿

着ぶくれて車曳きくる月の坂

事故多発点看板の立つ

マンハッタン花の四十二番街

復活祭に染め玉子など

放浪の春泥つけし旅靴

紙飛行機は海に向ひて

病床にうつらうつらの白昼夢

箸転んだと笑ふ芸子と

ハーレーで出勤ホテルの支配人

ラトルスネック彫りし長靴

蒜をしこたま入れた五目飯

お化けそろそろ身支度のころ

毎朝をちがふ彼氏に起される

ジゴロの武器は口説とマスク

大切の臍くり正に臍にまき

おけらが鳴けば蚯蚓鳴くなり

月照らす屍衛兵に佇ちし日よ

孫国体で選手宣誓

名も知らぬ鳥の来てゐる眼鏡橋

雪舞へる川さざれ波立つ

朝市に野菜乾物商ひて

ホームページを開く立春

花しづか丸太の椅子に老二人

合唱すれば山笑ふかに

平成十一年六月十六日 東郷神社和楽殿

連衆 東明雅 上月淳子 武村利子

篠原達子 浅賀淑代

雅

代

達

雅

利

淳

代

雅

代

達

代

雅

達

利

淳

達

雅

淳

代

達

利

淳

代

達

利

津

利

歌仙「夏蝶や」 近藤守男 捌

夏蝶や鳥居よりでて副都心

守男

未央柳の揺るる池の辺

碧

癖を承知で撫でる顎鬚

和子

山はるか眉月淡くかかりゐて

美恵

新蕎麦ありとへたなポスター

和

運動会ビデオ構へて右左

恵

校長先生化粧念入り

淑

逢引といふあやふさを楽しみに

恵

ピーポー聞けば直ぐに飛びだす

碧

東京を育てるためにノー発言

こ

誰の噂か噓十回

碧

凸凹に月見ゆるなり北風

恵

山猫の馵者鞭鳴らすらん

こ

コソボ地区勝利宣言敵味方

淑

痩せてはゐても子ども愛らし

和

花繽紛灯籠の文字巻込みぬ

碧

春の江田島海は風ぎをり

同

雲雀野に発掘の声研して

和

手術した痕残す頭骨

淑

流木の動かぬままに苔むせる

恵

珈琲滓も蚊いぶしとせむ

同

うしろから抱けばダビデの背の様

こ

掻いてあげるとマニキュアの爪

同

しんどいねんあかんいややと振り馴れぬ

碧

飲んべい同志あてぬ銘柄

男

猪喰うて外は糞と坐る奴

同

通夜見舞には無月よく合ふ

こ

閉店のセール完売そぞろ寒

淑

秋刀魚匂へるビルの煙出し

同

棟梁になる夢語る大学生

こ

初版高値と鑑定にかけ

碧

午後十時ミステリーツアー出発す

恵

バイエルを弾く爺はのどらか

碧

異国語の紙切り囲む花見客

男

埠頭かぎろふ出船入船

淑

平成十一年六月十六日 東郷神社和楽殿

淑

連衆 松本碧 式田和子 吉村多みこ

淑

金久保淑子 山口美恵

淑

歌仙 「涼しさや」 権頭和弥 捌

淑

涼しさや明治の辞令御璽の印

和弥

梅雨の館に恩賜軍刀

郁子

山を踏みボツカは何を想ふらん

あかり

犬の名前はリキと決めたる

蓉子

あるだけの灯を点し月を待つ

弘子

箆に盛りたる通草まるめろ

和代

美術展ゲルニカ搬入慎重に

智恵

ピンクのゴムでくくる黒髪

郁

兄ちゃんと呼びつついつか恋仇

郁

魂の音うつす五線紙

同

神何処コソボ難民さまよひて

同

落葉の積もる街の丁字路

弘

萬歳の才蔵太夫と仰ぐ月

恵

ひいふうみいと酔はず徳利

代

似非教授ラビアンローズ朗々と

代

あつと驚く朱鷺の成長

郁

花守りて外つ国人と花の下

代

遠くのどかに響く鐘の音

郁

軽やかに母の滑らす春障子

恵

阪神ファンやよっしやノムさん

郁

二十四の瞳の島もハープ橋

郁

躁と鬱とが交々にくる

恵

息のんでお化け屋敷に立ち竦む

り

年の離れた夫を持ちたり

弘

ペディキュアの少女らの夏たくまじき

代

卒都婆小町となりてひたすら

同

目まぐるし台詞ト書と総稽古

郁

電子レンジの作るボルシチ

郁

月渡る三交替の息子たち

り

追伸二行下り築組む

蓉

旅の荷に木の実色々まじりゐて

弘

記念写真にあくび写りぬ

蓉

白き杖「夢」の文字を鮮やかに

郁

年に似合はぬ麻雀の卓

郁

賑やかにまたにぎやかに花見舟

弘

鱸に付きくるだんだらの蝶

弘

平成十一年六月十六日 東郷神社和楽殿

連衆 東郁子 中田あかり 五味蓉子

市野沢弘子 長崎和代 須田智恵

歌仙「風の滴り」 杉山壽子 捌

東郷神社風の滴る中になかな

蟬穴ひとつ走り根の先 久美子

凶工室三角定期取り出して 清子

ガムにキャンデイさぐるポケットきよみ

仲天の月を持ちあぐクレーン車 利子

稽古終らぬ舞台うそ寒 豊美

秋拾彩面白く端縫ひせる 利

デートスポット勘違ひして 美

カクテルはマダム特製「恋知らず」 豊

人形の瞳に見つめられつつ み

けん玉の県大会に勝ち残り 清

背山に遠く寒猿の声 豊

着ぶくれの農夫合掌月まろく 美

マンション住ひ豊少なき 壽

富本銭掘り出し変る考古学 清

話の腰を折ってにつこり 利

げに永き刻の痛みよ花筵 み

かぎろひの野に犬と入りゆく 美

春闘は職をよこせとプラカード 利

長良川べり国盗りの城 清

酒蔵に白壁ずらと並び立ち 利

名医の技は連針の効 豊

オルゴール鳴らせば過去の蘇り 清

煮ても焼いても食へぬ目金 壽

端居せる拗ねっぱなしのおばあ様 美

昔の男許してもよし み

ポンドガールナイスパデイに磨きかけ 豊

魔法の髪を掛けるジプシー 清

高原の織月に雲うすく展ぶ 豊

師弟打連れ虫を聞く会 美

早稲みかん指の先より香らせて 利

引越し貧乏だけの人生 清

七カ国操るあいつ旅が趣味 美

松坂登板ドームどよめく 利

ベビーカー幌にいっぱい花吹雪 清

蛤寄せる遠浅の海 豊

平成十一年六月十六日 東郷神社和楽殿

連衆 副島久美子 下鉢清子 小出きよみ

梅田利子 高橋豊美

歌仙「夏至近き」 中野昌子 捌

夏至近き社の庇風の音 昌子

飛沫涼しく幣掛る池 文子

珓瑠鍋グズベリーなど煮詰めあて 路子

少し丈切る吾子のジーンズ 千町

山脈の肩のあたりに月昇る 麻子

自慢の籠を見せる茸狩り 政志

森陰に合ふは妻恋ふ鹿ならむ 富美

女王様は取り巻きの芯 町

押し押してクリノン攫ふアントニオ 路

崩るる砂に埋る足跡 文

縄文の歴史次々塗り替へて 麻

臘八粥をさらさらと喰ふ 志

氷壁にビバークをせり月下点 町

ゴミ問題に悩む村長 文

君が代の意味を知らずに歌ひをり 町

すんと胸に占ひの言 美

坪庭に植ゑたる花を待ち侘びて 志

土鳩鳴きたりうらかな朝 美

金色の上簇の繭産業に 麻

無欲に暮らす島の人々 路

砥素入りの酒の効き目のそろそろか 町

ろくろつ首の届く行灯 路

呆け味は芸術といふ老作家 美

長逗留の宿のむささび 文

お相手は聞くだけ野暮よ草苺 路

緋文字の浮く抱擁の時 町

バンドネオンタンゴ演奏リバイバル 文

大陸横断列車疾走 同

満月へ心自在に遊ばせて 路

ざる一杯に届くままかり 町

石榴割れ青磁の壺に活けらるる 麻

どうするどうする不良債権 路

磯釣りが父子の絆結びつけ 志

茶髪のくれし長き礼状 美

フィナーレは美しくあれ飛花落花 昌

夢の国へと架る初虹 美

平成十一年六月十六日 東郷神社和楽殿

連衆 橘文子 倉本路子 原田千町

内田麻子 峯田政志 村田富美

歌仙「楷の木」 東明雅 捌

楷の木の杖を頼りの大暑かな

片陰拾ひ下校する子ら

冷しそば具をたつぷりに作るらん

回覧板は窓に掛けをく

釣宿の魚拓黒々望の月

行く秋惜しむ友と行く旅

仮縫ひのピン打ち終へてロザリオ祭

クリーンレディ片ピアス揺れ

女性には声をかけねば失札に

未だ嘸みをり嘸みきれぬ蛸

夕暮の水かけ不動繩のれん

万年前座愚痴る凍月

風邪心地郷土の便りを読み返し

ノートマックを探す新宿

虎の子をはたいて狙ふ宝籤

天気予報がまただます人

花曇り野点の席をしつらへて

轉りなれぬ山の鶯

ごちそうと汽車が話題の百閒忌

まあだまあだと思ふこのごろ

梅雨明のころごろ様の威勢よく

ビールの泡を受ける口髭

黒い服黒い帽子の神父様

真赤な嘘のばれぬ人生

心から嫁の料理をほめちぎり

学校用語で口説く姑

血統書持たず気促に犬を飼ひ

年の利息は二十一円

下り月舌長婆が泣いてゐる

鳥にくれる庭の熟れ柿

困炉裏恋ふ新聞都市に住みわびて

くらやみ鍋に集ふ一族

スポーツをしても減らない体脂肪

新入社員のはころはスマート

花びらの空に蝶舞ふ夢の中

霞の遠ちに溶くるヴィオロン

平成十一年七月二十一日 江東区芭蕉記念館

連衆 青木秀樹 秋山志世子 日高玲

伊勢本如代 紺野千寿子

歌仙「極暑」

今宮水壺 捌

ムウムウと顎でもの言ふ極暑かな

せめてこれなと冷酒の盃

稜線の重なる辺りけざやかに

二十四色揃ふパステル

市電ゆく学生街に月仰ぐ

猿を乗せたるやや寒の肩

秋祭皆器量良し女笠

ジャニーズ系をアマントにして

ボキヤ貧もただ居てくれるだけで好き

外遊すれば諸国おねだり

一回がやみつきとなる賭博場

辻占餅割れば吉の字

鬼平の手下車座耳を寄せ

大川下る猪牙の早舟

賞つべしや月兎に冬毛びつしりと

男ばかりで嘆く少子化

たわわなる血脈桜花の旅

大念仏のひびく木母寺

春風に天秤担ぐ豆腐売り

コンビニで済む電話料金

バイエルの百番までは暗記でき

痴呆の婆に絵筆にぎらせ

逆転の満塁被弾夏終はる

夢こぼしつつハンモック揺れ

オーロラが起ちはじめたる北の空

歩哨は想ふ残し来し女

糸つむぐいとしい人の結城織

蛇口ひねれば水がしよろしよろ

月皎々虚実半々連句の座

馬鹿丁寧にお辞儀する虫

胸に棲む父母遠し崩れ築

伝記作家の資料蒐集

パソコンの親指シフト教はりて

朝餉夕餉の祈り忘れず

百代の花のしづまる寂光土

ひばりの影の消えし薄雲

代

道

義

泉

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

道

歌仙「牛蛙」 倉本路子 捌

まひる間を遊ぶ余生や牛蛙
 羅しやきと着こなせる人
 山の駅青葉の風のまつすぐに
 ナビゲーターは北西を指す
 独り居の月に歴史書繙きて
 芸術祭に古典演奏
 狹庭辺に紫式部実を結び
 見知らぬ女が厨房にゐる
 太陽のせいと言ひつつ目の眩み
 こむらがへりで又も欠勤
 領海に怪しき船の出没す
 オランダ人の好む焼鳥
 釣銭にいちやもんつける冬の月
 帳尻合はす神様の留守
 十年目司法試験に合格し
 踏み外したる木道の端
 誰も皆即興詩人花の下
 洋酒の瓶を透かす麗か
 君知るや伊予柑甘き彼の国を
 ビッグバンなど怖がらぬ知事
 大鰐をひようとあしらふピーターパン
 氣いつけなはれ綿菓子の子
 襟足に汗疹のみゆるいとしさよ
 じらしじらされ様みすま
 しづしづと秘仏開扉の式すすむ
 ゲームソフトははやも完売
 エピソードに子供ら有頂天

路子
 蓉子
 紀子
 英二
 政志
 英子
 蓉
 二
 紀
 志
 英
 二
 同
 蓉
 同
 英
 紀
 蓉
 紀
 二
 蓉
 紀
 二
 英

二夜続きの夢の不思議さ
 流氓の身に長江の月まろく
 対座して呑む邯鄲の酒
 馬上より鹿狩りの下知颯爽と
 パンパンパンと張り扇打つ
 長々と歯の無い話つづきめて
 雑の店で選ぶお道具
 絢爛とライトアップに浮かぶ花
 風船売の戻りゆく背

鴉がゴミをつつく街角
 赴任せる神学校に凍る月
 九州場所の枱に招かれ
 紐引けば唐子人形宙返り
 スペースシャトル発射先延べ
 本丸に車座組んで花の宴
 借景の山眺むうららか
 ドイツ製ピアノ届きし春の午後
 ダージリン茶にバタークッキー
 三つ揃びしつと決めて首相番
 隔靴搔痒つらい水虫
 螢の闇濃き方へ消えてゆき
 異国の嫁の多き集落
 陶酔のカーマストラ秘伝にて
 保険金詐欺種は尽きまじ
 屋根裏に小豆洗ひの音がする
 井上円了くつがへす謎
 戦友と松茸焼いて月の酒
 薬師寺の鐘そぞろ身に入り
 ライフワーク二科展に出す抽象画
 ジベタリアンは何をダべるの
 かけてある煙草のけむり雨の中
 お巡りさんに道を聞くなり
 花の下カメラにポーズ園児たち
 琴弾鳥の遊ぶ枝先

二
 紀
 志
 英
 志
 蓉
 英
 路
 志
 二
 紀
 志
 英
 蓉
 路
 志
 二
 紀
 志
 英
 蓉
 路
 志

歌仙「御蔵河岸」 篠原達子 捌

御蔵河岸土用太郎の風わたる
 金魚ちらちら光る水桶
 全集の別巻入荷知らせてきて
 慣れぬ手つきで叩くパソコン
 月の出に窓を大きく開け放ち
 運動会の準備忙しく
 住友のブランド売れず新ちぢり
 おしゃれして行く犬のお見合
 指笛が逢瀬の合図海女の小屋
 携帯電話せかす後朝
 悪夢またブラックマンデーなりしかと

達子
 豊美
 守男
 郁子
 和代
 かりん
 同
 代
 同
 男
 豊

平成十一年七月二十一日 江東区芭蕉記念館
 高橋豊美 近藤守男 東郁子
 長崎和代 登坂かりん

歌仙「百骸九竅」

橋文子 捌

大の字の百骸九竅三尺寝

青田の風の通る縁側

巡航路出航の潮待つならん

トロンボーンを軽く乾拭き

月明りピエロの舞踏酣に

嬰をあやしてゆらり蓑虫

梶子の黄を炊き込めし銅の釜

やまと座りの阿弥陀様なり

蛇の化身妃の夢を訪れし

受胎の予感ひたと湧き来る

確信となりし自信の投球法

パイオリズムの線のなめらか

凍る月なかなか溶けぬ舌下錠

身世打鈴息白く告ぐ

ドル相場個人投資家弾み付け

ハンバーガーの肉の荒挽き

出走馬勢揃ひして花吹雪

撮影器材春泥をよけ

復活祭美髯蓄へ辻楽士

ひやかしの筈いつかさぞっこん

セーラー服着せて脱がせる老の趣味

壺よ皿よと探すデルフト

葡萄酒の銘にもなりて古館

国士無双を自模り逆転

タブレット取り返しをり梅雨しとど

雷鳴の裏山で鳴く

優勝と憧れの座に出島酔ひ

平氏の裔を誇る能登人

膝薄き女と逢ひたり蛾眉匂ふ

忘れ扇は又来るの謎

ぬり壁のスクリンサーバーそぞろ寒

ペットロス症鬱の始まり

ご注文・汁・昆布・鮫鱈のやうなもの

ちびりちびりと宵の二合半

橋暮色花の奥よりひろがりて

こくんと揺れて流れゆく難

*韓国の身の上相談

平成十一年七月二十一日 江東区芭蕉記念館

連衆 大窪瑞枝 和田順子 八代嫺

本田弥生 中野昌子 鈴木慎二

歌仙「炎帝と」

豊田好敏 捌

炎帝と我慢くらべやアスファルト

ひまわりふたつ街路樹の下

青簾桶屋の鉦音たてて

ポトル入れにも猫をアプリーケ

うす雲にたゆたふ如く月の舟

山粧へる峽の分校

菊人形腰に竹刀をはかせやり

おさな馴染は目を見張る美女

引く波に直なる恋のさらはれて

川端の小舎出逢ふほりもの

四つ角の駐在巡查いつも留守

ごろすけほうと鳴きし木菟

月満てり夜毎にのびる軒つらら

脳は死んでも魂はまだ

ソムリエのとくとくと注ぐ赤ワイン

タペストリーは渋きゴブラン

鉄鉢に舞ひ込む花はご喜捨して

娘息子の朝寝たつぷり

朧夜のお軽を語る住太夫

機織り候賃仕事まで

地震きて箆笥おさへる細き腕

別れ話にぬつと兄さん

さぎ師でも優しかつたら満足よ

象の鼻もつ欽喜天なり

原発の電力落ちぬ水母来て

ジョンFケネディージュニアも事故

戦前のぼっくりよりも高き靴

ひえつき節を覚え転勤

晩秋蚕月にかそけき繭の嵩

秋刀魚に絞る酸橋到来

美術展遺作となりし絵を運び

くじの順番決めるじゃんけん

横綱を破る若さは見事にて

春椎茸を出荷する村

薄墨の花そのままに千年紀

吾子と競ひて揺らすふらここ

麻

香

孝

香

惠

淳

麻

孝

香

惠

孝

惠

孝

惠

孝

惠

淳

孝

惠

淳

同

孝

紀

麻

敏

紀

紀

惠

紀

歌仙「梅雨明るる」 八角澄子 捌

川の瀬のきらめき増して梅雨明るる 澄子

たたく水鶏に渡る霞切 和子

待つてたと谷中生姜を一口に 哲

抽象柄の大皿を焼く 千恵子

測量隊磨くコンパス弦の月 暁巳

どこに降ろすか蠟燭の斧 千

秋狂言披露されてお軽役 巳

手とり足とり教へすぎたか 和

書き込みのホームページで皆ばれる 同

懐中汁粉包む紋紙 哲

伝統の手わざと紙捻ほめられて 和

青木玉ゆく牛込の坂 巳

サッカーの子等の家路に月上る 千

日韓友好キムチふるまふ 同

むせる癖なんでも加齢と医者は云ひ 和

千年紀またぐ猫又の笑み 千

結界は花の散り敷く処まで 和

お稚児の眉を描くうららか 巳

朝寝してジャンボの籤のあたる夢 哲

不燃のゴミがそつと燃やされ 千

雑巾がしぼれぬままに親となり 巳

大雨の中撒水車来る 同

重ねぬる晴れ着の裾の重たくて 和

才媛なれどフラッパ一とか 巳

思ひ差し拭いてくれるな紅のあと 和

気障っぽいことするな兄さん 哲

狙の鯉観念す四条流 同

炭売り今や菓売りなり 巳

朗々と月に歌ひぬババロソテイ 哲

嘘か本当かわからない秋 同

万聖節かぼちやの面をそつと付け 澄

苦い顔してすする珈琲 巳

頬髯はわれら恩師に似たれども 同

のどらかすぎて御再考くる 和

引越をはやも終へたり花見酒 澄

てんやわんやを笑ふ山山 千

平成十一年七月二十一日 江東区芭蕉記念館

連衆 式田和子 中川哲 鈴木千恵子

島村暁巳

歌仙「幽霊の」 原田千町 捌

幽霊の演し物かかり夏薊 千町

空蟬ひとつころぶ片隅 弘子

ビル設計コンピューターに描きあてゑみこ 千

濃きコーヒーのお代りを淹れ 碧

満ち潮の入り江を照らす月の影 健悟

灯台守撮る芒背景 時子

国体の選手見送る県庁舎 忍

食ひ気ばかりで婚期遅れる 悟

好きごとと言へどもまめな男あり 時

遣伝子組変へ嫌な進化ね 碧

目覚めれば百年前の核の冬 悟

ほうとつぶやく鼻の月 弘

ドラム缶スプーン杓文字も打楽器に 忍

カギツコ達の街の溜り場 弘

鳥居からこつくりさんが引き返す 悟

野守鏡の消ゆる飛火野 碧

此の国は花の途絶ゆるところなく 同

春のサラダにハーブたつぷり 忍

若駒にルドルフの名を継がせし 悟

留学終へし村の秀才 弘

お札所を巡る菅傘雪の積む 時

物言ふ瘤をそつと撫でつつ 悟

図書館の喫煙室を探し当て 時

羅旬語にして艶書代筆 碧

雷鳴に抱けば骨のきしむほど 弘

ユトリロの母娼婦シュザンヌ 碧

路地裏にグルメ貴頭の集ふ店 忍

銘酒銘柄戸棚満杯 弘

十六夜のお江戸に着きし宅配便 忍

翁の愛でしいとど跳び付く 悟

爽頼に無念無想の指を組み 同

孫子に残す美田などなし 時

マジックの如き四割五割引 碧

寝台列車夢のまにまに 弘

重き扉開けば蝶と花の苑 町

雨の過ぎたる清明の山 忍

平成十一年七月二十一日 江東区芭蕉記念館

連衆 市野沢弘子 吉村忍みこ 松本碧

佛淵健悟 梶井時子

源心庵連句会

歌仙「月待ちて」

東明雅 捌

月待ちて酌めや葛飾新しぼり

明雅

鱸鱸のつややかな卓

水壺

ダイパック観楓の列賑かに

瑞枝

小石けり行くいがぐりの吾子

碧

遠き嶺望む露台に画架立てて

冬乃

ひねもすひびく郭公の声

佳実

塩運ぶ人を守りし道祖神

枝

押して押されてシャッターの縁

乃

トレーナーさらりと脱ぎし背に惚れ

碧

西郷さんも眠れない夜

実

高速はいつもどこかが渋滞で

乃

つぼ心得た按摩鍼灸

壺

底冷えの巴里で流行の療養所

碧

天窓に見る宵の凍月

実

ジャムセッションちよとコーヒータム入れ

枝

二個のダイスが忘れ物なり

壺

来し方の花片覗くたなごころ

同

まだきに詰める壬生の鐘番

枝

春霖の路面電車に小学生

乃

ホームステイに通す日本語

枝

台湾だ土耳其だ地球縮んでる

同

十字を切つてどげう汁煮る

碧

さもあらばあれすけすけのキス

壺

スキー合宿見せつけのキス

実

冬晴れの先は知れてる地獄谷

壺

光熱費などほんのちよびつと

実

脱サラののんびり犬と羊飼ひ

乃

古代の米の稔りまちつつ

碧

劫立てとなりて腕組む小望月

乃

忌札張られ夜寒肌寒

壺

漂流の光太夫めくわが余生

碧

地図にない旅探る名水

乃

一期一会主客の会釈にこやかに

枝

卒業式の歌の練習

碧

咲きそめし花は祇園の紅枝垂

乃

蝶たをたをと越えてゆく垣

乃

平成十一年九月二十四日 於 源心庵

乃

連衆 今宮水壺 大窪瑞枝 松本碧

百武冬乃 有田佳実

乃

深川連句

歌仙「爽かや」

東明雅 捌

爽かや則天去私の筆の跡

明雅

草枕して月の出を待つ

玲

コスモスにチェス弾く人や誰ならん

靖子

紅茶をすすり語る一刻

K

留学と決めて会社を飛び出せる

鶴鳴

革ジャンパーで防ぐ寒風

玲

初鷄の鳴かぬ頃から起きる僧

鳴

味噌の匂ひの方丈に満つ

K

開拓の村に育ちて二十年

玲

髪多き身は苦勞多くて

靖

思ひざし嫂の手にしたたれり

玲

灯にぶつかりて落つる唾蟬

K

夏の月だんだら色に雲染めて

鳴

ガイガー管にさはぐ山里

K

高校の駅伝競走B・Sに

靖

お風呂上りの爪を切りをり

鳴

花朧世界革命未だ遠し

同

十字架の耶蘇たたく春雨

K

子供らはみな空缶に入れる蝌蚪

鳴

テラスハウスに猿を追ひこむ

玲

ベトナムに無銭旅行を洒落こんで

鳴

貧乏ゆすりうつるすててこ

玲

水貝に下町育ち目尻下げ

靖

年増芸者の美しき足

K

ヒモでゐてくれればよいと囁かれ

玲

住宅ローン民衆の枷

鳴

在りしものなべてへだてり冬の霧

K

燕尾服から鳩を取り出す

玲

リーグ戦優勝セール秋祭

同

ネオンの巷月は天心

K

老い果てて朝寒夜寒かこちつつ

靖

区長賞得て下げる溜飲

玲

少年の眼澄みある窯の前

鳴

獅子座流星寒明の空

K

薄墨の花佳き夢を見つづけて

雅

高速道路逃水を追ふ

玲

平成十一年十月三日 江東区芭蕉記念館

玲

連衆 日高玲 関口靖子 加藤K

井上鶴鳴

大窪 瑞枝

猫養会には研究熱心な方々が揃っているの
で、このねこみの通信を見ても土良の会誌を
見てもいつも凄いなあと嘆息させられるばか
り。その私がかの順番で連句について一席
物申さねばならないとのこと。蘊蓄はないし、
調べ物は大嫌い。どうしてこんな私がふつと
連句に紛れこんだのでしょうか。

「少年H」はお読みになりましたか。主人
公は昭和五年生まれ、神戸の洋服仕立職人の
息子。さすが将来は妹尾河童たる気力才覚に
富んだ生きのいい少年です。彼の眼から見た
戦中戦後の日本、町や学校や家族の有為転変、
同時代を生い立った自分の経験が色々思ひ合
わされて大変面白いです。

ただ、この時代の日本の一般庶民が戦況の
現実など知っている筈がないし、国策批判す
るはずがないという事を、昭和史に照らして
逐一あげつらい、すべて後から言っていること
だと断じている本も出ています。でも少年H
の地に足のついた生活感からすれば、負け戦
の現実がうすうす彼に見えていたとしても不
思議とは思えません。

それに比べて東京の月給取りの娘は、上つ
方の極秘情報もれ聞こえて来ることもなし、
労働者の生活感から駄目なものは駄目と見え

て来るリアリズムもありません。親も先生も
建前だけを口にし、空襲は益々激しくなるし、
あちこちで兵隊さんは全滅するし、日本はど
んどん追い詰められていずれば本土決戦で一
億玉碎は必至と観念していました。

自分の死が今日明日にもせまっています。

野山も空もいやが上にも美しく、本という
本は私の知らない世界をぎっしりと秘めてそ
の背表紙を並べている。将来というものがも
しあつたら、私はきつと意義ある仕事をやり
遂げるに違いない。こんなもの一切から何故
自分が無理矢理もぎ取られていかねばならな
いのか。この理不尽を従容として受け容れる
支えが欲しい。達磨大師は面壁九年だけれど
私にはそんな時間はない。壁と一緒に砕ける
前に安心立命したい。半ばは答えを求め、半
ばは現実から目を逸らすため、ひたすら読み
に読みました。国が滅びたら自分もないとい
う前提には何の疑いも持っていませんでした。
ところが突然だんだら服の道化が現れてそ
の壁を舞台の書割りよろしくぼんと蹴飛ばし
てしまったのです。八月十五日でした。

それは神の救いでも何でもなく、正に道化
のおちよぐりでした。突然目の前に広がった
真っ白な時間。壁の問題は正しくはなくなっ
たというわけではないが、とりあえず明日の
向こう、永遠の手前まで延期されました。
ここで少年Hはためらいもなく彼の異能を賭
けて画工への道を着々と歩み出します。

私のポケットにもとりあえず流行の夢が飴
玉のようにごろごろしていました。新憲法が
出来て、世間は民主主義だ女性の参政権だと
賑やかなことになりました。世が世ですから
中には共産主義を後光のようにまとった集団
も大変な迫力で闊歩して、いわれのない優越
感を押し付けられました。

でもそれもこれも何時あの道化がひよつと
り現れて蹴つ飛ばすかもしれないのです。あ
れほど圧倒的だった国家だつて何だったのか。
権威とされるもの一切は相対的であり、何時
か私はリリパットを眺めるガリバーになつて
いました。リリパットにとつてガリバーは人
外の人です。自分を消去して見れば、私の嫌
いな横柄、権勢、したり顔、卑屈、みんな面
白く、可愛らしくさえあります。昔、私は世
捨て人だと名乗つて大笑いされました。多分
リリパットを面白がつて分析したり批評する
のが野心ある人に見えたのでしょうか。

司馬遼太郎は自分の全作品は敗戦の兵であ
つた二十三歳の自分への手紙だと言ってます。
私がああ時の私に向かつて言つてやれると
したら音楽でしかありません。感性、技術、
勤勉そして一瞬一瞬に閃く決断、そのすべて
を挙げて音楽が目的とするのは無です。誇り
高く刻む無に至る時間。

連句の道の贅にこんな落葉がひっかつたの
は偶然ではないと思いませんか。

浅賀 淑代

Mad with poetry,

I stride like Chikusai

into the wind.

(Penguin Classics "On Love and Barley:

Haiku of Basho" より。Lucien Stryk訳)

右の原句、おわかりになりますか?この選集に併記されてはいませんが、「冬の日」の狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉

です。訳者の註にある通り、Chikusaiは、古の「詩人ヒーロー」。stride(闊歩する)と具体的に書き込まれたことで、読み手には、竹齋なる人物とそれに比される芭蕉自身の動きある姿が彷彿とします。名古屋の連衆への翁の興奮気味な挨拶、風狂心を解しての面白い翻訳と言えらると思います。

また「こがらし」は単にthe windと、季の見えない訳になっていますが、「こがらし」を表すのに訳者は、例えば wintry(冬の)、nippling(身を切るような)等の説明(形容)をなまじいに加えない方がよいと考えたのではないのでしょうか。その方が竹齋||芭蕉の風狂に相応する「風」、例えば「こがらし」がイメージされる・そのように思い巡らすのですが、皆様はどう評価されますでしょうか。外国の方々の連句では、しばしば季語がネックとなって立往生することがあります。

二年半ほど前のある国際連句会でのこと。カ

ナダから見えたハイク詩人に発句を所望しま

した。ところが、出された句は無季の句で、

出来れば季の言葉を入れて下さいとお願いし

たところ、厳しく反論されたことがあります。

相手の季語の捉え方、関わり方といったも

のを十分に理解しないうちに、発句に対する

確たる考えも持ち合わせない者が、狭い了見

で「キマリですから」と説得しようとしても、

それは無理でした。何より、遠来の客人の発

句(こ挨拶)、即座に返答してこそ俳諧。そ

れに、芭蕉様曰く、「ほ句も四季のみならず、

恋・旅・名所・離別、等無季の句有りたきも

の也。(以下略)」「(去来抄)とあることに

思いが至っていれば・と省みるこの頃です。

さて、二十韻「ねこの子」。前回のナオ3

の2句それぞれに厚木市の高島富子さんが付

けと英訳を試みて下さいました。

①住込みの家庭教師の干す手巾 玲

成績UP月に誓いて 富子

(better grades promised

to the moon Tomiko)

②ライオンも小鳥も驢馬も遠巻きに 紀子

真夏の月から墜ちたET 富子

(ET dropped out

of the midsummer moon Tomiko)

連句は初めてと伺いましたが、面白い付句を有難うございました。意表を衝いたET句を頂戴し、②をナオ3、4と治定いたします。

* 連句と酒 *

「大道詰将棋」

今宮 水壺

これは昔話。新宿の居酒屋で軽くやった後駅に向っていると、路の傍に人だかりがしている。覗いてみると例の詰将棋。「どうです一手」と声をかけられてつかうかと・・・。

電車に乗って座席に落ち着くと、隣にサラリーマン風の男が座って話しかけてきた。「あなた、さっきのあの三手目がよくない」と言う。生返事をしていると、鞆からノートを取り出し、サツサツサツと縦横の線を引いて先程の駒組を書き入れ、「いいですか、ここはこうして、こうなって・・・」と、「それじゃ駄目だ」頭の上から声落ちてきた。見ると吊革を掴んだこれもサラ風の男が覗きこんでいる。「どこが駄目だ」と座席。吊革も鞆からノートを取り出し、線を引き駒を書き入れて自説を開陳。座席が反論。どうでもいい私は眠りこんで・・・。眼が覚めると二人とも消えています。

◇猫養会案内◇

猫養会初懐紙

○日時 平成十一年一月十九日(水)

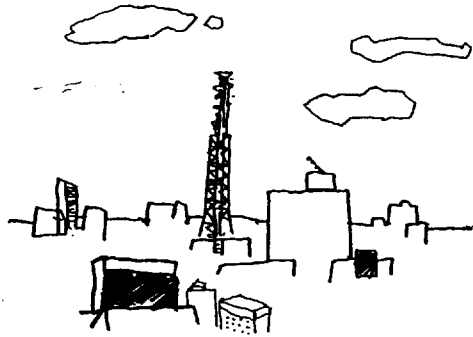
十二時より歌仙興行

○場所 江東区芭蕉記念館

最寄駅 都営新宿線「森下駅」

▽訂正とお詫び△

前号8頁「春の夢」のご連衆名で「上月麻子」とあるのは「内田麻子」の誤りです。おわびいたします。



落語と翁

橘 文子

俳聖と申します芭蕉翁という方がある年のこと、越前の永平寺へお詣りを致しました。若い坊さんが五、六人雑談をしている。中の一人が「ごらんさい、あれが今有名な芭蕉翁という俳諧をやる人だ」「ほう芭蕉翁か、しかし、仏に対して礼をしないのは何故だ、仏に礼をしないのは失礼だな」と、聞こえよがしに大声で言うのが耳に入ったものか、翁は静かに振り向き、「仏とは極楽道の案山子かな」「仏を指して案山子とはけしからん」翁、扇面を取り出し、「開けば山嶽これ三界、つぼめば一本、これ一片」また開いて「涼風を忘れ給ふないつまでも」と扇がれた。坊さん二の句が告げず「あなたはそれほど悟りを開いていながら、何故聖僧になられんのか」翁、にっこりと笑い「夷狄をはなれて禽獣におよぶ、古池や蛙とびこむ水の音」と口ずさみつつ、飄然と去ったと言いますが、なんのこったか、あたくしにやあちつとも判りませんが。

ここまでは、橘家円喬から習ったという、六代目三遊亭円生(本名 山崎松尾)の「菟蕪問答」の枕である。

(註) 案山子・大正頃まで、何程かは役に立つもの、の意味で使っていた)

「菟蕪問答」の作者は三代目林家正蔵、もと託善という禅宗の僧だった。この癖は嘉永頃の成立という。

西行は落語の主人公になっているのに、翁が出て来ないのは、落語にし難かったからと思われるが、傑作「金明竹」に「古池や蛙とびこむ水の音」が出て来る。この作前半は狂言の「骨皮」を石井宗伯が翻案したもの、後半は初代林家正蔵作「阿呆の口上」と言われ、一八〇二年(享和二年)の成立。

道具家の主の留守にやっ来た来た男が、与太郎に、伝言を早口にまくしたてる。仲買の弥市に取次いだ道具七品「祐乗、光乗、宗乗三作の三所物、ならびに備前長船の則光、四分一ごしらえ横谷宗珉小柄付の脇差、あの柄前は木が違います。のんこの茶碗、黄檗山金明竹、寸胴の花活、『古池や蛙とびこむ水の音』あれは風羅坊正筆の掛物で、沢庵、木庵、隠元禅師張交ぜの小屏風」の口上が判らず、おかみさんが聞き直しても、さっぱり要領を得ない。主が帰宅し、仔細を聞くと「仲買の弥市が気が違って、遊女を買って、千艘や万艘と遊んで、孝女が掃除が好きで、隠元豆に沢庵ばかり食べて・・・」といった調子なので、「はっきりしたところが一つくらいないのかい」「古池へとびこみました」「え、あいつには道具七品預けてあるんだが、買ってかなあ」「買わずでございます」。

【Q】 高年齢化が言われる俳句・連句界ですが、それでもいぶん若い人たちの参加も増えてきました。先生はこのような新しい環境に育った人たちとの付合でどんなことをお感じでしょうか。

【A】 このごろ連句に列なる若い方は、みな外国語がとてども堪能である事を痛感します。昔の人も一応外国語を心得てはいたのですが、それは大学に入るため、あるいは出るための条件に過ぎない人が多かったのです。現在は、外国語の知識なしには日常の生活も出来ない有様です。それ故、学んだ外国語が昔よりずっと身についており、それが作品にもあらわれるようになりました。

その反面、終戦以後、中学・高校・大学を通して国語や国文学、ことに古典文学の教育が殊の外疎略にされたため、この方面の知識または若い人たちの興味も段々乏しいものになって来ました。「芭蕉の俳諧が分からなくなつた時、日本人は完全にアメリカナイズされた事になる」と、昭和初期に予言したのは寺田寅彦氏だったでしょうか。その時がまさに今日到来したと言ふべきでありましょう。

私は数年前「電脳連句」ということが言われ、本にもなつた時、本当にびっくり致しました。コンピューターのすばらしさは聞か

れておりましたが、自分ではワープロも打てないメカオンの私は、あたかも、浦賀の沖に黒船が押しよせた時の江戸市民みたいな心境だったのです。と申すのは、その前だったかチエスの名人と試合をしたコンピューターが見事名人に勝つたという噂を聞いていたからです。

連句の作り方、その式目・去嫌い、はては歳時記とその使い方をインプットされたコンピューターは、私の当時の想像では、ただ単なる勝負の機械であり、連句の相手から受ける暖かい連衆心を求めるのは不可能でしょう。これでは連句の文学性の破壊に他ならないと思つたのです。

しかし、あとで電脳連句とはコンピューターを使うけれども、それをメディアの具として自由に連句のサークルを作り、より多くの連衆と付合をする架空の座を作るものと分り、成程と理解しました。

これは今までになかつたビジュアル・コミュニケーションとして、今後益々発展して行くことでしょう。事実、この方法で、たとえば、日本と外国との間に、同時に一座を持つ事が、既に何回も行なわれ、成功しているのを聞く時、連句国際化の方法としては、最良の方法であると考え、若い方たちのご努力に敬意を払う次第です。

◇ 猫養発展基金ご協力有難うございます。

一万円 梅田利子

(敬称略)

◇ 基金の口座 富士銀行新宿西口支店

普通 3376045 猫養基金

.....\$.....\$.....

あとがき

○ 最近、「詩のボクシング」というものを観戦した。絶叫歌人として有名な歌人と詩人との「異種格闘技」。グラブこそ付けないが、ロープを張つたりリングの中で、8ラウンド3分ずつ、それぞれ自作詩渾身の朗読で雌雄を決するのである。なるほど、詩は格闘技でもあつたのかと大いに感銘をうけた。

○ 今号より、パソコンネットで盛んに連句活動されている猫養若手、鶴鳴・蘭石・悟乃志乃さん方に、リレー・エッセーでこの方面のことを書いて頂く予定です。お楽しみに。

季刊「ねこみの通信」第三十七号

発行者 猫養連句会

編集人 町田市金井6-7-6 佛測健悟

〒一九五〇〇七二

印刷所 アトリエ・Neko